

「初期大乘佛教の研究」

小川 一 乗

すでに周知の如く、『律藏の研究』（昭和三五年）、『原始佛教の研究』（昭和三九年）というすぐれた研究成果を公刊してきた著者が、大小乗の三蔵にわたる膨大な資料を網羅して検討を加えたのが、八百余頁（本文八一頁、索引三七頁）からなる大著としての本書『初期大乘佛教の研究』である。初期大乘佛教といえ、大乘佛教の起源が問題となってくるが、相変わらずその研究は、適切な資料の不足という非常な困難の下にある。本書の研究目的の主眼は一言でいえば、著者が「はしがき」においても表明している如く、その大乘佛教の源流について、従来一般的である「大衆部起源説」に大きな疑問を投げかけ、大乘經典に広く見られる「佛塔信仰」と、その佛塔に生活の基盤をおいたと推定される「菩薩ガナ」の存在との上に、その起源を根拠づけようとした一点にあるといえる。

本書は序論と九章とから成り、合わせて十章に分けられている。次に、それらの内容を紹介したいが、紹介するといっても、本書の大半は論証のために引用された資料であり、それらに対する委細な検討を加えたわけではないので、通読した限り

での簡単な紹介を記す程度に止める。

序論（一〜五八頁）は三節から成る。第一節「初期大乘佛教の教理的特徴」では、大乘と小乗とを区別する教理的な特徴を、内外の諸学者の見解を紹介することによって列挙している。大乘と小乗とを区別する教理的特徴を論じているものは種々の佛教科資料の中に散見できるが、いまはそれらの佛教科資料を検討する煩瑣を避け、諸学者の見解とそこに見られる共通的特徴を以って、一応の初期大乘佛教の教理的特徴としている。第二節「大乘佛教は大衆部から発達したか」と第三節「大衆部の文献」とは、まさしくの本書において主題となっている問題の提起である。すなわち、大乘佛教の起源に関して、教理の類似性を以って、大乘が大衆部から起ったと推定する従来の説が不十分であるという問題提起である。その理由として、第一に、単に教理の類似性ということだけでいえば、大衆部に限らず他の部派の教理も多分に大乘に影響を与えていることを論証している。加えて、大衆部系のものを見做されている経律論に対する検討を加え、その結論として、大衆部系のものを見做し得るのは、「摩訶僧祇律」と「大事」とのみであると断じている。第二に、大乘の起源は教理の起源であると同時に、教団の起源でもあるから、大乘の「教団としての起源」を問う必要のあることを論じている。

以下の九章は、是の如きの問題提起の下でなされた著者の調査検討の歩みであろうかと思われる。

第一章「大乘經典の成立年代」(五九〜一三三頁)は第一節「大乘經典の性格」、第二節「大乘經典の訳出」、第三節「大月氏国と北インド情勢」、第四節「最古の大乘經典」の四節から成る。本章の中心は、漢訳佛典の訳出年代の検討にある。その検討によって、最古の初期大乘經典として、最古訳の漢訳佛典の中に引用されている「菩薩藏經」「六波羅蜜經」「三品經」の三經を挙げている。漢訳佛典の訳出年代等については、最近出版された塚本善隆著「中国仏教通史I」(鈴木学術財団、昭和四三年三月)と比較してみると、著者独自の資料検討が加えられていて興味がある。

第二章「部派佛教における菩薩思想の發展」(一三五〜一九四頁)は七節から成る。第一節「菩薩の觀念の出現」と第二節「『中』『雜』二阿含に「菩薩」の語の現れない理由」とでは、千馮竜祥「菩薩思想の起源と展開」(宮本正尊編「佛教の根本真理」)などの諸研究を参照しつつ、菩薩の觀念が大乘佛教になつて初めて現れたものでないことは確かであるが、しかし意外にその用例の新しいこと、及び、「阿含經」において菩薩の觀念の必要性が資料的に見て認められないことを論じている。第三節「『ジャータカ』と菩薩の理念」と第四節「弥勒菩薩」においては、一般的に菩薩の觀念に関して、過去佛(ジャータカ)とか将来佛(弥勒)とかが何らかの關係を持っているかのように考えられているが、実際に資料を検討してみると、過去佛や将来佛の觀念からは菩薩の觀念が導き出されないこと、す

なわちジャータカも弥勒の觀念も共に菩薩の觀念なしに成立していることを論証している。本書を興味あるものとして一つの研究成果であろうと思われる。但し、問題としては、後世の人々が過去佛や将来佛の上に、菩薩の觀念を全く見出さなかつたかどうか、ということになると別の問題となってくるのではなからうか。また譬喩物語(Avadana)の類はどうであろうか。かくして、第五節「佛伝とくに燃灯佛授記と菩薩の觀念」において、佛伝文学の中の燃灯佛授記の思想こそが菩薩の觀念を生み出すに至つた点を論証しようとしている。第六節「菩薩の意味」と第七節「菩薩の階位・四性行と十地、多佛の出世」とは、菩薩(Bodhisattva)の語義解釈についての諸説を紹介し、次に部派佛教における菩薩の意味内容を検討している。これは次章へと連結している。

第三章「初期大乘佛教の菩薩思想」(一九五〜二八二頁)は五節から成る。第一節「菩薩の觀念と自性清淨心」では、佛伝から大乘へと展開した菩薩の觀念の質的な変化について、佛伝の菩薩は「成佛することが決定している菩薩」であるのに対し、大乘の菩薩には「菩提心をおこした菩薩」、すなわち「記別を得ていない凡夫の菩薩」の觀念が發展展開していることを強調している。この点に関して、山田竜城博士が、部派佛教から大乘佛教への菩薩觀の發達を、「本生のボサツから願生のボサツへ」という表現で示し、「菩薩は願って惡趣に生れる」という大衆部の思想に「願生のボサツ」の起源を求めていることを批判して、「願生のボサツ」はすでに修行の完成した大菩薩であ

り、それは「本生のボサツ」が記筋を得て成佛の決定しているのと本質的な相違はないと論じている。かくして記筋を得ていない凡夫の菩薩こそ大乘の菩薩の一大特徴であることを主張している。続いて「菩提心をおこした凡夫の菩薩」がその自覚を記筋なくして持ちえる根拠として、自性清浄心を問題としている。そこにおいて著者は、自性清浄心とは「心の本性は清浄である」ということであり、人間の心が邪悪であり煩惱に汚されていることを認めながらも、しかもその奥に菩提心を発見することの可能性を意味している、と理解している。確かにそのように理解することもできようが、自性清浄心とは、より厳密には「心は本性として清浄である」といういい方が一般的であるから、それを大乘的に換言すれば、「本性として」とは「本来的に・はじめから」ということであり、「清浄」とは「縁起空」ということであり、「人間の心なるものは、実は縁起であり空・無我である」という意味であるべきであろう。従って、

佛伝から大乘へと発展展開した菩薩の観念の中に、佛教の根本思想である縁起観がはたらいっていないとはいえないのであるから、それによって自性清浄心を如実に知見し、菩薩行へと展開していくのであろう。第二節「弘誓の大鑑」では、大乘佛教だけに見られる一特徴であり、菩薩行の性格をよく示している「弘誓の鑑を被る (mahasamaha-sannadha)」という用語例を検討している。第三節「大乘佛教における陀羅尼の意味」では、はじめは教法の憶持とそれを正しく活用して心を平和に保つ力の保持とのものであった陀羅尼が、次第に密呪的

性格をおび、呪文的に転化していった点を跡づけている。第四節「善男子善女人」では、大乘經典に見られる「善男子善女人」という言葉の起源とその意味とを究明している。第五節「女性の菩薩の在り方」では、「女人成佛・変成男子」の思想を資料的に検討している。

第四章「菩薩の修行の階位」(二八三〜四一九頁)は、第一節「菩薩の階位の三種」、第二節「四種菩薩の階位」、第三節「十住説の展開」、第四節「地の思想の発展と共の十地」の四節から成る。各節のタイトルによって示されている如く、菩薩の修行のあり方が、資料的時代的に検討され、その相違点や類似点が究明されている。菩薩の観念が大乘に至って、「記筋を得た菩薩・一生補処の菩薩」と「菩提心をおこした菩薩・現実の凡夫の菩薩」との二本立てとなり、後者の菩薩が、前者の菩薩を「理想的な菩薩像」となし、その理想に向っての経路が、種々な菩薩の修行の階位となっていくと論じている。従って、最初期の菩薩の観念の中には、「大悲闡提」の如き、一切衆生を救済するために永久に成佛しない菩薩という観念があったとは考え難いとしている。確かに、著者のいう「大悲闡提」とは、入楞伽經に説かれている二種の一闡提の中の随一「菩薩の一闡提」のことであろうから、入楞伽經が初期大乘經典と見做されえない限りきわめて当然のことであろうが、しからは、その「大悲闡提」という思想を生み出すに至った菩薩の観念の萌芽はどの時期にまで遡るのが妥当であろうか。

第五章「初期大乘教団の組織」(四二一〜五四八頁)は二節

から成る。本章から終りの第九章までは、著者が「はしがき」で強調していた「教団としての大乗」に対するまさしくの論究である。

第五章の第一節「初期大乘佛教の戒学」では、初期大乘佛教の戒律が、般若経や十地経をはじめとして吟味され、初期の六波羅蜜の中の戒波羅蜜の内容が、一様に十善道のみであり、在家菩薩のためのものである点を論証し、それが出家菩薩の重視によって次第に比丘の戒律へと接近していった推移を討究している。第二節「菩薩の在家生活と出家生活」では、在家菩薩から出家菩薩への分化のありさまを、出家菩薩の日常生活を主題としている。「菩薩本業経（華嚴経浄行品の最古訳）」や「郁伽長者経」によって生活規制の内容を列挙しつつ示している。かくしてこの二経に対する検討により、出家菩薩の居住処としての「塔寺・廟」が問題になってくる。

第六章「大乘佛教と塔寺」（五四九～六〇一頁）は、第一節「廟・塔寺の原語」、第二節「法華経」より見たる塔寺とスツパーバ、第三節「般若経」における經典崇拜と舍利供養の批判、第四節「大乘經典における塔寺・塔」との四節から成る。まずここに問題となっている「塔寺・廟」とは佛塔信仰に基づく礼拝の対象物であり、出家菩薩の住処であることによって、単なる「僧坊・精舎」(vihāra) や「僧伽藍・僧園」(saṅghaṭṭha) ではなく、むしろ「制多(caitya)」でもなく、を調査検討し、その原語がまさしく stūpa であることを諸經典によって文献学的に論証している。説明するまでもなく、

stūpa は佛舍利 (stāpika = buddhadraṅga) を祀る墓である。それは、佛への信奉者（在家）達によって監理され、信奉者たちの供養物によって生活していた者がそこに居住していたのである。続いて初期大乘經典における「塔寺」の用例によって佛塔信仰のありさまを検討し、それが相当大きな比重を持っていることを明らかにしている。

第七章「部派佛教と佛塔の關係」（六〇三～六五七頁）は、第一節「部派佛教の教理と佛塔」、第二節「部派佛教における佛塔供養の實際」との二節から成る。パーリ上座部や説一切有部を中心に、部派佛教において佛塔信仰（供養）が異質的なものであり、重視されなかった事情を——(一)佛塔供養は行われていたが、パーリ律には佛塔に関する明確な記述がないこと、(二)佛塔供養は生天の業であって解脱の修行には役立たぬこと、(三)塔は在家信者の建立するもので、本来は教団（サンガ）内になかったもの——などの理由によって明らかにしている。比丘であればより以上に、積尊に対する畏敬の念は強かったと思われるが、やはり、積尊への畏敬の念と佛塔信仰とは融合しえなかったであろうか。

第八章「大乘教団と部派教団との關係」（六五九～七七五頁）は六節から成る。第一節「問題の所在」を除いた以下五節において、第二節「カローシュティー碑文と大乘教団」、第三節「律藏より見た大乘教団と部派佛教の關係」、第四節「求法僧の旅行記」の三節では社会形態的な立場から、第五節「九分・十二部経と大乘經典との關係」、第六節「論書における大乘佛

教の問題」の二節では教理的な立場から、大乘教団と部派佛教との関係を、不十分な資料の中より、カローシユティ―碑文、律藏、法顯や玄奘や義浄の旅行記、アビダルマ論書などによって究明している。第一に、部派教団と大乘教団との関係を社会的な教団の存在において検討し、まず、佛塔が部派教団の内部にある場合も外部にある場合も、佛塔には比丘僧伽に所属しない佛教者がいたであろうことを推定し、彼ら佛陀を信奉し佛塔に居住した人々の集りを「佛塔教団」と仮称している。次に、大乘の出家菩薩と部派佛教の比丘とが一つの精舎で共同生活をなし得たか否かを検討し、羯磨において共同生活は不可能であると結論している。それについて、法顯や玄奘が「大小兼学寺」や「兼習余部」の寺院があったことを報告している問題については、部派佛教の寺院ではありえぬことであり「これはおそらく大乘を宗とする寺であったであろう」と推定し、求法僧の旅行記に対する詳細な検討を加えている。第二に、部派佛教と大乘佛教との関係を教理的な面より検討し、第五章においては、九分教と十二部経とを問題とし、第六章では、部派佛教と大乘佛教とが相互に相手をどのように意識し排斥していたかを紹介している。興味ある問題は、「大乘非佛説」について、部派佛教が大乘佛教を正統佛教として承認していなかったことはいうまでもないが、しかし部派佛教の側から出された非難ではなく、大乘佛教が自らこの問題を提起し、大乘こそが真の佛説であることを顕示しようとした産物ではなからうか、と解釈していることが注意される。

第九章「菩薩教団の性格」(七七七―八一頁)は、著者が前八章までにおいて調査検討してきた結論であり、二節より成る。第一節「佛塔信仰と大乘佛教」では、おおよそ部派佛教から発展したものと見難く、しかも佛塔信仰と深い関係にある「大乘佛教の源流を推定して、大乘佛教は、部派教団と並列的に存在した「在家佛教」の流れが発達し成立したものであり、その生活の基盤は佛塔信仰であった点を結論としている。加えて佛塔信仰は、小乗佛教からも佛伝文学からも出てこない「永遠なる人格佛・救護者としての佛陀」の觀念を内在しているものであって、特にそれが法華經において教理と結びつき大成されていることに論及している。第二節「菩薩教団の組織」では、大乘の菩薩は菩薩だけで教団を組織していたのではなからうか、という推定の下で、大乘経典の中から菩薩の教団組織があったことを予想せしめる用語として、しばしば見出される「菩薩ガナ (bodhisatva-gana)」「菩薩僧伽 (bodhisatva-saṅgha)」の用語例を問題としている。著者は、特に原始佛教時代には存在しなかった「菩薩ガナ」という大乘経典だけに見出される新しい用語例に注目している。

以上、きわめて簡単な紹介をなしつつ、時には気儘な所感を加えたりしてきた。ともあれ、本書は初期大乘佛教の起源を究明した興味ある研究成果である。特に著者は、大乘佛教の起源の問題を、教団(サンガ)という社会形態の上から「教団としての大乘」という観点において、律藏の研究者として権威ある

著者らしい調査検討を加えている。著者にして可能な成果である。

本書において論究されている種々の問題は、集約すれば、(一)菩薩の觀念の起源について、(二)佛塔(stūpa)とその居住者について、(三)菩薩ガナ(Boḍhisattva-gaṇa)の存在について、の三点が重要なものである。そしてこれらに対する著者の見解は、いずれも確実な論証を背景としているだけに信頼しえる研究成果である。これらの問題は、今後も学界において種々の方面から検討されるであろうが、本書において示された成果は、必ずや大きな学的影響を与えるであろう。

思うに、是の如きの大著を成すためには、数多くの先学者達のすぐれた研究成果を参照しなければならぬ。本書においても、先学者達の研究成果が、たとえそこに著者独自の討究が加えられているとはいえ、多分に依用されている。それは學術研究にとって当然のことである。ただそのためかどうか、本書全体として、人間の身体でいえば、少し贅肉がつきすぎた感じを受けた。しかしそれは、龐大な本書の研究内容を完全に消化していない当方の責任かも知れない。

(昭和四三年三月、春秋社、A 5版、五、〇〇〇円)